| 今週のみことば | 「癒された後に」<br><br>（ルカによる福音書１７章１１節～１９節）<br>「そのうちのひとりは、自分のいやされたことがわかると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリヤ人であった」(17:15,16)<br>仲森文穏 |
|---|---|

## 今日のメッセージ要旨

○重い皮膚病に苦しむ人々が、イエス様に救いを求めたお話です。１２節の「彼らは遠くの方で立ちどまったまま」という言葉は、社会から締め出され、ぼろを着て、人影を見たら、「わたしは汚れています」と叫ばねばならなかった彼らの悲しみを表しています。しかし、彼らは幸いなことに「交わり」を持っていました。ルカ５章やマタイ８章にでてくる皮膚病の人は１人ですが、ここでは１０人です。同じ痛みと苦しみによって、結び合っています。１人ではくじけそうな時も、仲間がいると元気が出ます。「イエス様、どうか私たちを憐れんでください」と彼らは声をあげました。これは共に祈る、祈りの言葉です。共に祈ってくれる友がいれば、力強いです。

○イエス様は、彼らに「祭司たちの所に行って、体を見せなさい」と仰いました。社会復帰してよいか否かは祭司の判断によりました。１４節に「彼らは、そこへ行く途中で清くされた」とあるのがすごいです。まだ体に何の変化もない、どこといって自分が救われたしるしもない、しかし癒されると信じて、彼らは歩み出したところ、その途上で、癒されたのです。世の人は「救いのしるしを見せてくれたら信じよう」と言います。しかしそれは逆で「信じたら、しるしを見ることができる」のです。

○癒された人は１０人でした。しかし神様を讃美するため戻ってきたのは１人でした。他の９人は癒されたことを家族とともに喜ぶため、家に飛んで帰ったのでしょう。無理もありません。でも、こうも言えます。彼らはイエス様に救われてもその生き方、教えに学ぼうとせず、馴れ親しんだユダヤ教の水に戻っていったのだ、と。
戻ってきたのはサマリヤ人でした。彼は外国人なので、祭司の証明は受けられませんが、癒されたことは分かりました。それで彼はイエス様にまず感謝したかった。癒されたことよりも、苦しむ自分に寄り添ってくれたイエス様を、彼は喜んだのです。イエス・キリストがいますことを喜び、感謝する、私たちもそこに信仰の基いをおきたく思います。

○渡辺和子さんの著書に、「請求書の信仰でなく、領収書の信仰で生きていきたい」とありました。「ください、ください」と祈り願うのもよいけれど、「確かにいただきました。有難うございました」と、感謝する心を私は大事にしたい、と言っておられるのですね。１９節を見ると、イエス様が祭司に代わって、このサマリア人に「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰が、あなたを直したのです」と宣言しておられます。この言葉を感謝し、受けとめ、彼は家族の元に帰って行ったことでしょう。私たちもイエス様の恵みに日々あずかっています。「確かにいただきました。有難うございました」という領収書の信仰を心に掲げ、今週の歩みを始めて行きたく願うものであります。